

CONTENTS

- ◆足助のサンショウウオ
- ◆旅日記 海と川(その1)八重干瀬
- ◆「旅する貝」～河口干潟に棲む不法移民者たち～
- ◆今月の一枚
- ◆「川会議の子供たち」
- ◆今月の調査風景

URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

足助のサンショウウオ

山上 将史

矢作川水系の巴川上流には現在のところヒダサンショウウオ(写真1～3)とハコネサンショウウオ(写真4～5)という2種類の渓流性サンショウウオが生息しています。いずれの種も源流部に生息し成体(親)は溪流沿いの石や倒木下、樹林の落葉下などにひっそりと暮らしているため、なかなか目にすることができません。また、大きな岩や岩盤の下などの伏流水中で産卵することが知られており、卵囊を観察するにはある程度の経験が必要となります(写真1)。では、サンショウウオを最も容易に観察できるのはいつなのでしょう?これは幼生と呼ばれる期間で、同じ両生類であるカエルで例えるとオタマジャクシの期間にあたります。今回は比較的観察が容易な幼生について話をしたいと思います。

卵囊から孵化した幼生は鰓から酸素を取り入れるためしばらくの間水中で生活



写真1: ヒダサンショウウオの卵囊

します。ハコネサンショウウオの場合、幼生の期間は約3年といわれており、季節を問わず一年を通して観察することができます。また、幼生の期間が長いので1年目の個体とそれ以上の個体とでは幼生のサイズもまちまちです。一方、ヒダサンショウウオ



写真2: ヒダサンショウウオの幼生

は春に孵化し、早いもので5月くらいから水辺に姿を現します。ヒダサンショウウオの幼生は一部の個体は越年幼生と呼ば



写真3: ヒダサンショウウオの成体

れ水中で冬を越すものもありますが、多くの個体はその年の秋に変態を終え陸に上がるため、観察できる期間はそう長くはありません。

2種の幼生が生息する環境には若干の違いがあります。ハコネサンショウウオの幼生は水深の浅い瀬などやや流れのある石の下などに潜んでいることが多く、川岸に近い水中の小石をそっと持ち上げると体をくねらせながら一目散に他の石の下へ逃げ込む姿を観察することができます。一方、ヒダサンショウウオの幼生は落差の下に形成される淵のような流れの緩やかな水溜まりに見られることが普通です。また、ヒダサンショウウオの幼生は食欲旺盛で、小さな枝を目の前でゆらゆら振ってやると枝先に食いついてくるほどで、自分よりサイズの大きなミミズに食らいついている姿を見かけたこともあります。

私は常に採集に出かけた先で出会った人には地域の生物について聞き取りを行います。サンショウウオについてはほとんどが幼生について認識されている程度で、成体を知る人はそう多くはありません。足助町の御内蔵連で50～60才の男性に聞いた話では、昔は療養のために御内蔵連の集落に滞在する人がいて、サンショウウオを生きたまま吞ませることがあったそうです。当時子供であった男性はサンショウ



写真4:ハコネサンショウウオの幼生

ウオの幼生を採集し、それで小遣い稼ぎをしたこともあるそうです。男性が幼少期に採集していたサンショウウオは一年を通じて採集が

可能なハコネサンショウウオの幼生だったのではないのでしょうか。

私がサンショウウオの調査を目的として足助町に通うようになったのは今から3年ほど前で、緒方清人氏と私と同じ会社に勤める真野徹氏に連れられて、早朝から段戸裏谷に自然観察に出かけた帰りに、寧比曾岳^{ねびそだけ}を案内してもらったことがきっかけとなっています。以来、暇があれば足助や設楽周辺の山にサンショウウオを探しに行くことが楽しみとなり、小さな沢でサンショウウオの幼生を見かけるとなんだかほっとします。しかしながら、現在では多くの地



写真5:ハコネサンショウウオの成体

域でこれらサンショウウオ類の減少が報告されているほか、ペットとして国産のサンショウウオ類が販売されている話もよく聞きます。飼育にはクーラーが不可欠となることから、一般の家庭では長期飼育は難しいでしょう。十分な設備や目的がない限りむやみな採集は避けるべきです。自然下で観察できることが何よりも大切なことであり、昔話にならないようサンショウウオが生存できる自然を永遠に守り続けたいものだと感じています。

(やまがみ まさふみ、環境科学株式会社 名古屋事務所)

海と川

その1 八重干瀬

旅日記

松武 義聰

願いがかなって、^{やびじ}八重干瀬(沖縄県宮古島)に上陸することができました。八重干瀬まつりは、旧暦3月2日の大潮に当たる4月20日から3日間の日程で始まりました。4月20日は初日で観光客らが約700人余りが干上がった雄大なサンゴ礁のドゥ瀬(人間の胴に例えた名称)に上陸しました。八重干瀬は宮古島平良市池間島の北東約5キロから15キロ沖合に大小百余り点在するサンゴ礁群。そのサンゴ礁群の中で最大のリーフがドゥ干瀬。普段は海中に隠れているが、年に一度この頃、大潮の干潮時に姿を現します。干上がったあちこちの水溜には、サンゴの幼生やムラサキウニ、青ヒトデ、小魚などが潜んでおりました。

足の裏を怪我をしないように靴を履き、軍手をはめて、ムラサキウニを捕ろうにも、サンゴ礁のすき間に必死に割り込み、捕まえることができま

せんでした。遠くの方に大きな物体があり近づいてみると、それは台湾国籍の漁船でした。サンゴ礁に激突し、船首が岩に潜り込んでいる状態でした。海域を熟知している船長さんでも、こんな事故を起こすんですね。幸い重油の流出はないようでしたが。3月に激突したとのことで早く撤去してほしいものです。

一時間余り散策して、この「幻の大陸」の神秘的な姿に感動しながらリーフを後にしました。地元の人達は、年に3日間の自然のドラマを大事にし我々観光客を道中を含めて心からもてなしてくれました。



台湾国籍の難破船



幻の大陸に上陸した筆者

(まつたけ よしさと、豊田市矢作川研究所 顧問)

旅する貝

～河口干潟に棲む

不法移民者たち～

澤谷 久美子

日本には外国の動植物が数多く棲んでいます。身近な例では、セイヨウタンポポ、アメリカザリガニ、ブラックバスなどがお馴染みです。

矢作川の河口干潟で貝類・カニ類の観察をしたところ、外国の貝がたくさん見つかりました。採集場所はかなり汚染が進んでおり、ヘドロが堆積していましたが、泥や砂を掘ってみるとアサリがたくさん出てきました。アサリとともに、東南アジア原産のイガイの仲間であるホトトギスガイも採集できました。名前の由来は、貝殻の模様が鳥のホトトギスの胸の模様に似ているところにあります。

堤防付近のテトラポッドにも多くの貝がへばりつくように生活しており、その中で外国



ホトトギスガイ

産のムラサキイガイを見つけました。ムラサキイガイは地中海原産の二枚貝で、1920年代に日本に定着しました。神戸や東京で最初に生息が確認されています。テトラポッドでは、コウロエンカワヒバリガイという二枚貝も見つけられましたが、この貝はオーストラリア、ニュージーランド原産で、1970年代に日本に移入し、西宮市香櫨園浜こうろえんで最初に確認されたことからその名がつけました。



ムラサキイガイ



コウロエンカワヒバリガイ

このように人為的に外国から来た生き物が、そのまま日本に棲み着き繁殖してしまった場合、それを帰化生物といいます。これらの貝は、どのようにして日本に来たのでしょうか。それは港などの内湾閉鎖水域に、外国船舶から放出されるバラスト水※に紛れ込んで入ってきたのが原因の一つとされています。矢作川の河口で世界の貝類に対面できることは

すごいことかもしれません。しかし、帰化生物によって在来の生きものが減少し、生態系に影響を与えていることは事実です。在来種が減少したのは、人間が自然環境を変化させ、生活場所を壊してしまったことが原因と考えられますが、帰化生物が在来生物を襲って食べたり、生活場所を奪ってしまうという原因も考えられます。また、帰化生物がもともと日本に棲んでいた近縁な種類の生きものと交雑して雑種を作ってしまうケースもあります。

そういった中、現在広く帰化しているムラサキイガイを使って海水の浄化を図ろうという取り組みを行っているところがあります。ムラサキイガイは植物プランクトンを食べ、あわせて窒素やリンも栄養分として吸収する性質があり、この性質を利用して海水の浄化を図るという作戦です。ムラサキイガイが棲み着くことで周囲に小エビなどが集まり、それを餌として魚が集まってくるという新たな生態系を作り出すことも期待されています。以上のように外来種が繁殖した矢作川河口ですが、外来種がやってきてもつつましい客人のように、長い時間をかけて存来種と共存できる日がくればよいと思います。

※貨物船などが空荷で航行するときに、船を安定させるために積む海水のこと。

(さわたに くみこ、愛知みずほ大学 人間科学部)

今月の一枚

ジャンプ！ジャンプ！ジャンプ！

明治用水頭首工の魚道を遡上する稚アユ

(二〇〇四年五月六日 新見克也氏撮影)



アユの遡上数の経年変化



※2004年は5月6日までの合計数

川会議の子供たち

高橋 聡

わたくしは、今年度の4月より豊田市矢作川研究所の研究に参加させていただくことになりました。前任の小川さんが「歴史的なもの」を追うという研究をされていたのに対しわたくしは現代の、そしてこれからの人々のありさまを見つめていく、といったこととなります。勢い、今回初めて参加させていただいた『川会議』においても、今の人々と、これからの人々=子供たちのありさまにどうしても目が行ってしまいます。



シンポジウムより

思えばわたくしが子供だった頃、環境への関心が高い親や先生たちは、子供たちへの願いからしばしば、消費社会的なもの—駄菓子、ジュース、アニメなどを遠ざけていました。子供たちは初め、家庭や学校の価値観の中で育つものですが、ゆくゆくは社会のさまざまな価値観の中で自身の価値観を身につけてゆきます。「正しさ」はそれ自体、魅力的なものではありませんが、一面うっとうしい部分もあります。こうしたことから、子供たちは青年となっていくに従って、川や自然から離れ「カッコいいもの」「魅力的なもの」へと視線を移していく、これが今までの子供たちのかたちであったように思います。

時は流れ環境の世紀に至り、事態はずいぶんと変化したように見受けられます。天然素材から作られた衣服は肌には快いが妙にダサイものでしたが、今ではむしろ高級な衣服としてデザインも洗練されデパートで売られています。石けんやシャンプーなども同様です。社会が環境意識を持ち始めたことで、子供たちが「正

しいこと」と「魅力的なこと」とのはざままで立ちすくんでしまうような時代は終わりを告げ始めているのだ、と実感させられます。

『川会議』では、こうしたことを改めてまざまざと覚えることが出来ました。親御さんと釣りに興じる子供たちは、一様にファッションブルで明るく朗らか、詳しく話をしてみればテレビアニメ大好きっ子、缶ジュースも駄菓子もイケイケでありました。わたくしはこうした今の子供たちに、新たな時代の到来を想像します。それは、環境への配慮が「カッコいいこと」「ファッションブルなもの」として認知され、フツの若者がフツに川を愛する世界です。このような、新しい時代への予感的中していくことを願ってやみません。

背景：子供あまご釣り大会より
 (たかはし さとる、
 豊田市矢作川研究所 研究員)

今月の調査風景

4月28日(水)

アユの調査時によく人に言われる言葉は、「お前ら、仕事が遊びみたいでいいな。」というものです。しかし仕事となれば雨の日も風の日も行わなければなりません。この日の海域調査では余りの強風で調査員全員が身の危険を感じるほど。初めて現場にて調査を中止する決定をしました。(吉鶴)

5月6日(木)

名古屋大学環境学研究科で、「生活環境主義における権力格差について」というゼミが行われました。生活環境主義とは、「地域の人々の生活の利益につながるように環境に取り組まなくてはならない」という考え方ですが、地域の中での揉め事についてはどうなるんだろう、といった議論が取り交わされ、実際にどんなことが起きているのか、調査していこうという話になりました。今後、名大の若い学生さんが皆さんにお話を伺いに行ったりすることもあるかと思いますが、どうかよろしくお願いします。(高橋)

編集後記

アユが日に90万尾のオーダーで遡上していると聞き、私も現場へ出かけました。わずか、5-6cmの稚アユが魚道の階段を次々とジャンプし上流へと向かう姿は、なんと逞しいことか！小さい体のどこにそのような力を秘めているの？
 矢作川で生まれ、三河湾まで降りて、再び母川を目指す。一匹のアユにすればそれはとても長い旅なんでしょうね。みんな立派なアユになるんだよと思わず祈りました。(内)

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
 TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
 E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。